筑波しらぎく

発行　筑波大学
白菊会事務局
茨城県つくば市
天王台1－1－1
電話 029(853)3230

印刷　前田印刷株式会社
電話 029(875)6696

変革期の医学教育と献体の意義

筑波大学医学群長
解剖学・神経科学教授
武井陽介

まず、本年も六月に筑波大学において医学類生の解剖実習を無事終了いたしましたことをご報告申し上げます。この実習は、医学類生が人体の精緻な構造を学ぶだけでなく、生命の尊厳と医療の本質を体感する貴重な機会です。六週間に渡る解剖実習の経験を通じて、学生たちは医療者としての確固たる基盤を築くとともに、人間性豊かな医師への第一歩を踏み出すことができました。

さて近年、医学教育を取り巻く環境は大きな変革期を迎えています。二〇二〇年度から実施された医学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂、そして二〇二三年度からの共用試験の公的化は、その象徴的な出来事といえるでしょう。

改訂されたコア・カリキュラムでは、Society 5.0 時代に即した医療人材の育成を目指し、AI・ビッグデータの活用能力、多職種連携、地域医療への理解など、今日的な要素が強化されました。これにより、解剖学を含む基礎医学教育においても、臨床応用や社会的文脈を意識したより統合的なアプローチが求められるようになりつつあります。

一方、共用試験の公的化は、医学教育の質保証という観点から画期的な変革です。これまで各大学の裁量で実施されてきた共用試験が、医師国家試験と同様の公的な資格試験として位置づ

令和五年度慰霊式（祭壇）

字題略歴
今井　凌雪（いまい りょうせつ）
本名：今井　潤一（いまい じゅんいち）
大正十一年十二月十九日・平成十一年七月二十六日
立命館大学卒・筑波大学名誉教授
日展参事・書法研究雪心会会長・
社団法人「日本書芸院」名誉顧問
朝日新聞社主催「現代書道二十人展」メンバー
日展文部大臣賞、日本芸術院恩賜賞受賞、
勲三等瑞宝章受賞

表紙筆者

けられることで、臨床実習前の学生の知識・技能の水準が全国的に担保されることとなりました。これにより、より実践的で充実した臨床実習の実現が期待されています。

このような変化の中で、解剖実習の意義はますます深まっていると確信しております。人体の構造と機能を深く理解することは、最先端の医療技術を適切に活用する上でも、患者さんと真摯に向き合う上でも不可欠な基盤となるからです。同時に、献体という尊い行為を通じて医学教育に貢献くださる皆様の存在は、技術や制度の変化だけでは得られない、医療の本質的な価値を学生たちに伝えています。

生命の尊厳、医療者としての使命感、そして人々への深い共感と思いやりの心―これらの普遍的価値は、皆様の崇高なご意思によって、次世代の医療を担う若者たちの心に深く刻まれていきます。テクノロジーが急速に進歩する現代だからこそ、このような人間性の涵養がますます重要になっているのです。

本学では、このような医学教育の変化に適切に対応しつつ、献体による解剖実習の伝統を大切に守り、さらに発展させていく所存です。新しい教育手法やテクノロジーを積極的に取り入れながら、皆様のご意思を最大限に活かした教育プログラムの構築に努めてまいります。また、学生たちが皆様の尊いご意思を深く理解し、生涯にわたって医療者としての使命を全うできるよう、倫理教育にも一層力を入れてまいります。

結びに、あらためて会員の皆様の崇高なご意思に深甚なる感謝の意を表しますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和五年度慰霊式（学長式辞）

追慕の辞

本日、ここに筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、筑波大学白菊会会員を代表いたしまして、謹んで「追慕の辞」を捧げます。

この三年間、私たちは新型コロナウイルス感染症の流行によって、さまざまな痛みや苦しみ、悲しみを経験しました。医療従事者の皆様におかれましては、大変な御苦労をされたことと思います。そして、この未知のウイルスが引き起こしたパンデミックは、世界中の人々を震撼させると同時に、献体登録をしている者にとっては、「この感染症で死亡すると献体が出来ない」と云う現実を知らしめました。献体登録に至った理由は、人それぞれでしょう

が、少しでも世の中の役に立ちたいとの思いは皆一緒だと思います。

私自身は、運転免許証の裏面にある臓器提供に関する欄は、長年にわたって一切臓器を提供しないとしてきました。しかし、五十代の頃、医師でもある某作家さんの著書を何冊か読んでから私の死生観は大きく変わり、六十歳の誕生日を迎えて献体登録をしました。

個人的には、コロナ以前に行なわれていた解剖の先生や会員の皆様との懇談会へ出席したことが良き思い出です。毎年送っていただく解剖実習に臨んだ医学生諸君の感想文は、全てに目を通しています。自らの手で解剖を行なったことによる人体への畏れは、医師になってからも忘れずにいてほしいと思います。またひとりの人間として、高い倫理感を持った思いやりに溢れた医師になって下さい。

終わりに、ご遺族様、関係者の方々が正常解剖、病理解剖、法医解剖に対して深くご理解を示されたことに、改めて敬意を表します。そして、ご献体いただき御遺志を全うなされた方々および医学のために貢献された故人に感謝を捧げ、心より御冥福をお祈り申し上げ「追慕の辞」とさせていただきます。

令和五年十月四日

筑波大学白菊会会員代表

青木秀夫

追慕の辞

本日、筑波大学篤志解剖体慰霊式が挙行されるにあたり、解剖実習のために御献体くださいました方々に、医学群学生を代表して謹んで追悼の言葉を捧げます。

私たちは、御献体くださいました白菊会会員の皆様、並びにご遺族の方々のご厚意により、今年の五月中旬から六週間の解剖実習を行うことができました。

六週間の解剖実習が終了して、約三カ月近くがたちました。そんな今、振り返ると、実習中の六週間は、医学生だからこそ特別に許される、人体解剖という行為に大きな期待を抱きつつも、非常に重い責任感や、慣れない作業への緊張感、学ぶ内容の多さに対する重圧に押しつぶされそうな日々でした。さらに、御献体いただいた故人とその御家族の方々に思いをはせ、また実習を共にする班員や先生方に対しても感謝の気持ちを持ち、今までに経験したことがないほどたくさんの思いを抱き、

日々を過ごしていました。

解剖実習期間中、常に人の死について深く考えさせられていました。中間試問のとき、剖出不十分な箇所があり、悔しい思いをした経験を通して、御献体くださった故人、そしてそのご家族の御意思を決して無駄にせず、学ぼうとする姿勢の大切さに改めて気づかされました。人の意思は、たとえその人が亡くなってしまっても後世に残り続け、私たちはその恩恵を受けて生きているのだと、私たちにできることは、そのことに強い感謝を抱き、今を全力で生きることなのだと考えました。

解剖実習を終えて、私は今まで学習した医学を、頭の中で概念的にしか捉えられていなかったことに気付きました。今回、実際にひとりの御遺体に向き合って、自分の手で解剖をすることで、頭の中の知識と実体験が結びつき、目の前で学んでいる医学知識を、自分自身の身体に投影することができるようになりました。ひとつの臓器を学ぶとしても、それだけを取り上げるのではなく、身体全体の中での位置、周囲の臓器とのつながり、神経や血管との関係などを、直接見ることができたため、今までの座学とは違った、非常にリアルで印象的な学びを得ることができました。また、解剖を進める中で、人の身体は教科書に書かれている通りではなく、それぞれ個性があるのだと改めて実感させられました。医師は、患者さんの身体の一部だけをみて、治療を行うことはできないと考えています。一人ひとりの個性を把握し、その方の心にも、体にも、周囲を取り巻く環境にも向き合う必要があります。今回の実習での学びは、私たちが今後そんな医師を目指すうえで非常に大切なものであると思います。

最後になりますが、御献体くださいました方々のご冥福を心よりお祈り申し上げますとともに、肉親の死に際し、悲しみや苦しみの中、御献体にご理解くださり、ご協力いただいたご遺族の皆様の計り知れないご厚意に改めて感謝申し上げ、追慕の辞とさせていただきます。

令和五年十月四日

筑波大学医学群　医学類二年

結城　舞

会員のみなさまからの便り

妻の出産と義母の献身

有賀文貴

私は男女各一名の二人の子を授かった。結婚してまもなく妻は受胎し、程無く悪阻が始まった。二人共初めての経験であり、私は妻がどうなってゆくのか注視していたがその内、妻は嘔吐し始め次第に激しくなり、食物を受けつけなくなった。掛り付けの産婦人科医に相談したら入院処置と相なった。入院後も状態は変わらず暫くしてから医師より、母胎に危険が迫っているので今回は出産を断念した方が良いと言われ、苦しんでいる妻の同意を得て流産させた。後日妻は実家の母にこの旨報告した所、母から気の弱さを叱られ今度出来て悪阻が始まったら直ぐ実家へ帰って来るようにと言われたとの事。私もそれが良いと思っている中、二回目の受胎が確認されたが妻の様子を見ていると、初期症状が前回より軽く妻もこの程度なら実家へ帰らず自宅で頑張ってみると言ってくれたので私も様子見をしていた。ところが日が経つにつれ、再び症状が以前のような状態になって来たので妻と相談して、今度は病院を替えて事情を話した上、早期に入院治療する事にした。その甲斐あってか入院後は悪阻の症状も比較的落ち着いていたのでホッとしていた所、医師が「出血し始めているから流産の恐れがあります」と言って来た。私は直ぐ義母に電話して今の状況を話すと義母は「すぐ退院して車で実家迄来なさい」との事。至急妻と打合わせして医師にその旨伝えタクシーを手配、東北の義母宅へ車を走らせた。待ち受けていた義母はタクシーを自ら手配した地元の病院へ導き妻を即入院させた。私は自宅へ戻りその後の経過を逐次電話で聞きながら過ごした。出血は止まり悪阻も義母の叱咤激励により無事に乗り切った由、見事男子誕生と相なった。聞けば義母は若き頃看護士見習いの経験があったとの事。後年第二子については受胎後直ぐ妻を義母の基へ送り届け無事女子も授かった。今成長した二人の子供を見るにつけ、当時の義母の協力にひたすら感謝あるのみである。

別　れ

市原静子

白菊会に入会させて頂いてから、何年経ちましょう。いつの日にと、心に思い立ち過ぎてきました。

この度は、思わぬ御通知を頂きまして身に余る思いです。茨城に住所を持って四十五年、習い事と思い民謡三味線を始めました。老いと共に、両親の他界、途々に兄姉との別れ、私も高齢と共に住み慣れた家と別れ、淋しさを胸に一匹の猫と共に、かがやきの郷老人ホームへ。見晴しが良く遥か遠くに富士山や牛久大仏、広々とした田畑・庭には桜数本、年に一度の土浦花火大会等。眺めていると、ふと我を忘れてしまいます。そして、終身見守り頂けるとの事で入居致しました。職員様の心の温かさに孤独な心を忘れます。知り合った友とも、食事・風呂を一緒に過ごし

てきました。友は熱心なお寺の信者さんで、共にお寺にも参りました。ある日、お風呂で友の足の浮腫に気がつき、体調等を尋ね話し合ってきました。この頃猫も食べなくなり、水を飲むぐらいに。トイレとよろしくしながら、十九年の生命に別れを。その淋しさにしばらく膝にのせありがとうと…。友は、日増しに浮腫が強く歩くのがやっとのようになってきました。

ある日、診察帰宅後「私、全身ガンだと告知された」と話してくれた。なんと言って良いか言葉がなかった。それから三カ月後、ヘルパーさんと車椅子散歩、それが最後の別れとなった。

民謡三味線で一緒に引き唄ってきた仲間、前向きに頑張ってきた仲間が「またね」と言って別れたのに、また会う事もなく永遠の別れとなった。入居して八年、友人と同じように私も足が浮腫んできた。車の運転も三月で別れ、自分の力で動ける限り力の続く限り、藤沢に置いてきた猫に会うためにバスで行き、水とエサを持って声をかけると、転がるように駆けてくる喜ぶ様子に、来て良かったと撫でながら「負けないで生きていこうね」と話しかける。猫が力を私にくれていると自分勝手に思い耽る限り、見守っていこうと決めています。ホームの庭にも子猫が生まれ、動物愛護さんにお願いしました。親はホームに戻され保護猫として見ていく事をお願いし、保護者として見ています。

庭の桜もすっかり青々として葉桜になってきました。私の人生も桜との別れも遠くはない事でしょう。

無題

大沢敏子

知人は言った。若くもきれいでもかわいくもないのにと。言われた私は、どんな顔をしたのか。知人は同じ言葉を繰り返し声高にハハと笑った。雑談中九十三歳の私の夫が、束縛する事が多くなったと話題にした時のことだ。真正面からの言葉だから、見るに堪えない私の姿なのだろう。七十八歳相応の老化に抗わず自然でなどと目を逸らし、奉仕活動を主にして来た結果なのだ。惨めだが仕方ない。笑い飛ばせばいいのに笑えなかった。言われた言葉を振り払おうにも振り払えない。やはり世の中見た目重視が本音。きれいでない妻に拘る夫。私は全否定され烙印を押された。風聞だが若者間にもルッキズムがどうの、不快だのと差別偏見があるとか。若くきれいに恵まれれば幸せ。きれいになるからアレ飲め、コレ塗れ、至る所でCM合戦だ。烙印を持つ私が人柄、心根が大事などと言ったら又冷笑を買いそうだ。立つ瀬がないから又思い込みかも知れないが、人は見た目だけでは決められないの心でありたいと思う。

私は漂着物が散乱する海岸を歩く。得体が知れないゴミ同様できれいではないが、海水流に洗われ、日差しに汐風に晒されたとしか言い様がないが、心を惹きつけられる物があるのだ。思わず拾って帰り飾る。それを見て興味津々の人、ガラクタ芥と避ける人それぞれ、それぞれで良いと思う。

夫は私が自分では見えない所も見ている筈、烙印を持つ老妻をどう思うの

か聞いた「白髪ふえたな、でもやさしい所あるし愛嬌もある。俺は頼っている」だった。烙印を何とかしようなどとは思わない。今迄通り質素清潔で折り合いをつけつつ、言動に、心身にまとうものに心して生きる。コロナも終息しつつある様だ。マスクをはずし、下を向かずに、私は私。それで幸せ。

老いぬれば
メッキもはげて
生きやすし

田辺聖子

無題

小沼勝行

私は昭和六十二年五月十四日筑波大学白菊会会員番号五三五、名前を小沼勝行と言います。祖母が墓に入る所が無いので、老人ホームに入っていましたが、死亡して献体に出しました。たしか自治医大へ行ったと今思い出しました。母の兄姉たちが考えてのことだったと思います。祖母は色々あったので、そこで私は献体を知り入る事にしました。

筑波大学白菊会総会へも五～六回出席しました。昼の食事のお弁当が美味しかった事、会員の方と話ししたり、式の厳かなこととか、花（白菊）を献花した事、バスで慰霊塔に行き待っている間歩道に胡桃が落ちていたり、秋だったのですね。コロナが流行り出してからは、出席するのを控えています。

会報は毎年配布されてくるので、一言書く気になりました。私は七十三歳に成り、光風会のグループホーム颯で、三名で食事を作ったり、作業に行ったりして生活しています。二〇二三年十二月八日に左足ひざの手術をしました。

一人の生命は全地球よりも重い

佐々木利男

今までになく人の生命が軽んじられる時代が、はたしてあったでしょうか？ロシアによるウクライナ侵略行為、イスラエルによるガザ地域への武力行使などにより、日常茶飯事多くの人の尊い生命が失われています。

私たちも、すっかり命が失われていることに、感覚が麻痺し他人事のように思いこんでいます。

一人ひとりの生命はいかに大切であるかを、もう一度根本原因に立ち返り、戦争をこの世から撲滅すべく、全力を尽くさなければなりません。

一人だけでは、無力かもしれませんが、大勢の人が結集すれば、偉大な力となります。

一日も早くこの世界から戦争が無くなることを願ってやみません。

恙なく

佐藤怜子

今から約四十六億年前に地球の誕生以来、夥しいほどの時の流れを経て人類の誕生を迎えた後、我々の祖先が二〇〇万年前に出現し、現生人類のホモ・サピエンスは二十万年前に黎明期を迎えたとされている。余りにも壮大

な故に凡庸な思考からは遥か遠く懸け離れ、どことなく童話の中の世界のようでもあり、大胆な発想を以てしても地球科学に親しみを覚えることのない壜、長い年月、瓶に入った梅の実の如く忘れかけていた。一方、近代の世界大戦や現代の戦争の中で無慈悲にも奪われた多くの方々の命は、どのような手立てを表明しようとも例えのない歴史の汚点として残るだろう。私たち人間の取り返しのつかない幾多の過ちは、時の権力者の意向により無慈悲な鉄槌が下される結果となり、再び、同じ行いが繰り返されることとなる。己の意思ではなく他者から葬られた慟哭は、永遠の記憶に留まり、残念ながら深傷を癒す術はいずれにも存在しないことを忘れてはならない。

母に抱かれた幼き日より迎えた生れ月から今日まで、多くの方々との出会いを通し焼物のろくろを回すように、私はわたしを再生することができたのではないだろうか。「人は誰もが始めから存在しなかったように消えていく」余りにも率直すぎて、つい、よそ見しそうになる日常の中、生かされていることへの尊厳と素直な感謝とが混ぜ合わされた独特な結晶が陽炎のように揺らめいている。マリア・カラスやエディット・ピアフの絶唱はある意味において、人生は艱難辛苦の時にこそ真摯に己と対峙し、疑問符の何故をつぶやきながら思わず見上げた青空に気付かされる。私が生かされていることや白菊会とのご縁も厚い壁に閉ざされていた遥か遠い日、全てが愛おしく懐かしく〝がらんどう〟の心に養分を注いで頂いたように思う。人生、何が起こるか分からないけれど、どのような難問であれ解けない問いはないのだから。また、自分の最もたる応援者は唯一の自分なのだから。

難　聴

鈴木雅子

言葉の聞き取りが難しくなり、聞き返すので面倒がられてしまい、話すのが苦痛になりました。四十代で突発性難聴を患い、少しずつ悪くなり不自由になりました。補聴器を使えば良く聞こえると思っていましたが、容易なことではないですね。補聴器を四六時中付け訓練して慣れないと、使い熟せないそうです。テレビドラマも見たいのでイヤホンを使って試行錯誤中です。難聴になったかな？と気付いた時から使用すれば良かったのかも知れません。楽しみも段々と少なくなってきて、さみしい此の頃です。でも生かされている間は明るく元気に積極的に暮らしましょう。

献体のきっかけ

藤澤みどり

現在七十五歳ですので、ずい分昔の話になります。TBSラジオの午前中の番組に、毎日、永六輔さんがいろいろおもしろいお話をしていたのですが、知り合いのお医者さんが初めて盲腸の手術をすることになり、メスを入れたら自分が思っていたよりスルッと切れて曲がってしまい、本能的に真っすぐ

にしなければと思い、またメスを入れたら〝人〟という字になってしまったというのです。そんな折、朝日新聞に「献体する人がいなくて深刻な問題になっており、将来、お医者さんの育成、医学の進歩に非常に不安だ」という記事を読み献体しようと決めました。その後、三十四歳から四十六歳の十年余りの間にお腹を三回手術して切り、三回目は大腸ガンでした。このときは手術する前の検査が一週間ぐらいの間にいろいろあり正直いって大変でした。一カ月近く入院し、退院のとき主治医が「神様があなたにもっと生きていなさいと言っているのです」とおっしゃってくださったときはうれしかったです。そんなときでも献体のことは忘れていたのです。勝手なものですね、生きていくことに一生懸命でした。六十歳になり、心も落ち着いた頃「献体したいと思っている」と友人に話すと調べてくれて、協会から白菊会を紹介していただき「受付は終わってしまい、また来年四月一日に…」とのことでした。ですがその年の八月か九月に白菊会から「家族の反対でキャンセルがありましたので会員になれます」とお話をいただき、心から良かったと思いました。最近は医学も技術も大変な進歩で、ロボットが手術するとか。私は七十二歳のときにヘルニアで内視鏡手術をし、前日まで歩けなかったのに手術した次の日には歩けました。さらなる医学の進歩、お医者さんの養成にお役に立つことができればと、心から願っております。

筑波大学　白菊会

本多静江

若い頃、家族で住んでいた所には、近くに海や山があり、とても住みやすい場所でした。夕方になると愛犬と散歩をし、すぐ近くには小高い丘がありました。丘に登ると太平洋が見え、沖をゆっくり進む大きな船、サンフラワー号を見ることができました。私はいつの日かその船に乗ってみたいと夢見ていました。

息子も海が大好きでした。仕事がお休みの時は必ず波乗りに行っていました。ある時、私は息子に「波に乗っている時はどんな気持ち？」と聞いてみました。息子は「ゆったりして波に揺られていると、何もかも忘れて最高だよ。いつまでもこうしていたい」と答えてくれました。

あれから二十二年が経ち、息子は三十歳の時に天国へ旅立ちました。私は今七十四歳です。六十四歳の時に治らない病気が見つかりました。辛い痛みもありますが、痛みがない時は元気で明るく過ごしています。これから先、きっとこのような病気が治る日が来ると信じて、私は献体を考えました。毎日前を向いて生きております。

解剖実習を終えて

稲見奈桜

実習初日、緊張しながら初めて足を踏み入れた解剖実習室。その時に目に映った光景を鮮明に覚えている。整然と並んだ数十の解剖台の上には、白い布に包まれたご遺体が安置されていた。それを目にした瞬間、これから始まる六週間の実習への意欲、緊張、そして不安…様々な感情が湧き上がった。しかし、その不安や緊張は、白い布を取り除きご遺体の顔を目にしたその瞬間に消え去った。しばらくして湧き上がってきた感情は、ご献体された方とそのご遺族の方々に対する敬意と感謝の気持ちだった。

そこからの六週間はまさに目まぐるしい日々であった。実習は体力的にも精神的にも想像以上に大変だった。すべてを学ばせていただこうと、一瞬たりとも気を抜かず、一日に何時間もご遺体と向き合った。実習が終わり家に帰ると、すぐにその日の復習と次の日の予習を行った。剖出の手引き・解剖学の教科書・アトラスなどを駆使して、不明な点を一つ一つ解決しようと努力した。疑問が一つ解消すると、さらなる疑問が生じる。そのため、予習復習は連日深夜にまで及んだ。朝はできるだけ早起きし、必ずその日の剖出手順の確認をしてから実習に臨んだ。このようなサイクルを続けていくうちに、だんだんと心の余裕がなくなってきた。それと同時に知識を得ることに夢中になるあまり、ご献体くださった方への感謝と敬意を忘れかけ、自分の中で解剖が単なる作業になりつつあることにふと気付いた。

そのことを私は素直に祖父に話すと、驚くべき話を聞くことができた。なんと最近亡くなった祖父の古い友人が、筑波大学附属病院での入院中に献体登録の申請をしていたというのだ。そして、ご家族は故人の帰りをずっと待っていると。私はご献体された方の思いとご家族の思いを改めて考えた。今まではご献体くださった方の思いを理解していた〝つもり〟になっていただけではないだろうか。ご遺体はモノではない。解剖実習で自分が向き合っているご遺体は何十年もの人生を歩んできた人間である。亡くなられても帰りを待つ人がいる。それぞれの思いを改めて想像し、感謝と敬意を忘れかけた自分を恥じた。それからは実習中に感謝と敬意を忘れることは一瞬も無かった。たくさんの方々の思いを感じ、敬意を抱きながら実習に励むことができた。

令和五年度慰霊式（会場風景）

この六週間、後悔の無いように実習に対して全力で向き合った。少しでも多くのことを〝先生〟であるご遺体から学ぼうと、貪欲な姿勢を貫いた。解剖実習最終日の武井医学群長の「医学は紙の上では学べない」というお言葉がとても印象に残った。まさにその通りである。今、解剖実習を通して知識を得ただけではなく、命に対する感謝と敬意という医学生として大切な精神も学ぶことができたと実感している。

最後になりますが、ご献体くださった故人、そのご家族、ご指導いただいた先生方に心から感謝を申し上げます。実習で経験したことを生涯忘れることなく、これからも医学に対して真摯に向き合い、立派な医師になることを目指し、日々精進したいと思います。

犬塚　響祐

解剖実習が始まる前、実際のご遺体を基に解剖学を勉強する意味を私は疑問に思っていた。つまり、ＣＧやＶＲの技術が発展した今、コンピューター上のシミュレーションで解剖をすることはできないのかと考えたのである。しかし、六週間の実習を終えて、その考えは私の中で完全に打ち消されたと言える。そして、ずっとこのままの形式で解剖実習を行なって欲しいと思うようになった。ここでは、そのような観点から解剖実習を振り返ろうと思う。

解剖実習をシミュレーションで代替できないと感じた理由の一つ目は、「人の体はアトラス通りではないから」である。実習中、ご遺体の筋肉の大きさや神経の走行が教科書・アトラスの記載と異なることが何度もあり、剖出の際に大いに苦戦した。観察したい神経が全然見つからず、隣の班に訊きに行くこともよくあった。一方、シミュレーションで解剖実習をするなら、観察するのは言わば標準化された人体モデルになるはずだ。すると、筋肉や血管は全ての班で同じものがみえるはずである。そのような環境で、各構造の剖出・同定の難しさ、人によって構造が異なるということの不思議さを感じることはできないと思う。

ご遺体を使わせていただくことのメリットの二つ目は、メスやピンセットの上手な使い方を学ぶことができることだ。解剖実習初日、メスがどれほど切れるものなのか想像がつかなかった私は、皮膚を剥ぐはずがその下の筋肉まで切りそうになったのを覚えているが、実習の後半では見違えるほどに素早く作業を行えるようになった。また、どのピンセットが使いやすいか、持っていて一番疲れにくいのはどれかなども知ることができた。この学びは、シミュレーションで果たして得られるだろうか。

三つ目にして最大の理由は、ご献体いただいた故人やそのご家族への感謝の気持ちを持つことができるからである。実習初日に初めてご遺体と対面したときのあの独特な雰囲気を、私は一生忘れないと思う。また、実習の開始時と終了時に黙祷を必ず行なったことも とても印象深く残っている。このように、医学の発展のためにご献体くださっているその遺志の尊さは、シミュレーションの人体モデルからは感じ取れないのではないかと思う。

もちろん、コンピューターを使った

シミュレーションにも利点はたくさんあると思う。一つは、ご遺体を準備し、また解剖実習中の環境を整えてくださっている先生・技術職員の方々の負担が軽減されることだ。また、剖出を進めても巻き戻しができることは、自己学習の際に大いに役立つと思う。しかしながら、これらの利点が、前述したことを覆せるとは思えないのである。仮にシミュレーションを導入するにしても、解剖実習の全てを置き換えるのではなく、一部分のみに導入するのが妥当だと思う。

解剖実習を終えた今、このような理由から、今の形の解剖実習をなんとか維持して欲しいと思う。一方、私たちが解剖実習を行うことができたのは、やはりご献体いただいた故人とそのご家族の尊い意思があってこそだと思う。改めてその遺志に深く感謝し、ご遺体を基に培った知識を使って医学の発展に寄与できるよう、これからも努力したいと思う。

長田早瑛

私が医者になろうと決意したのは、中学生の時に心臓の手術を受けたことがきっかけです。長い入院生活と手術への不安を取り去り、健康な身体で日常生活を送ることを可能にして下さった主治医の先生方に憧れ、心臓血管外科医になることを決意しました。心臓血管外科医としてたくさんの患者さんを治療するという志を遂げるべく筑波大学の医学群医学類に入学して早二年目の六月、こうして人体解剖実習を無事に終えることができました。

外科医志望ということもあり、医学類のカリキュラムの中で最も楽しみにしていたのが人体解剖実習でした。解剖実習の日が近づくに連れて、心待ちにしていた実習に参加できることへの喜びが増していきました。しかしその一方で「ご遺体を扱う」ということへの実感と、それに伴う緊張感も増していくのを感じました。

そして迎えた解剖実習初日、初めて入る解剖実習室のひんやりとした空気と各解剖台に安置されたご遺体に背筋が伸びました。いざご遺体と対面し実習を開始するとなった時、班員全員がメスを入れるのをためらい、しばらく行程に取り掛かることができなかったのをよく覚えています。ご遺体が一人の人間として人生を全うされた方であること、そんなご遺体を解剖させて頂くのには大きな責任が伴うことなどを痛感し、それまでに感じていた以上の緊張感に包まれました。

この緊張感は解剖実習を終えるまで消えることはありませんでした。しかし回数を重ねていくと同時に、身体の構造を実際に見て・触って学ぶことへの喜びと楽しさをひしひしと感じるようになりました。中でも印象に残ったのは、心臓の剖出と観察です。心臓の構造や大きさはもちろん、自分が手術を受けた部位を実際にこの目で見て確かめるという貴重な経験を得ることができました。心臓以外の様々な構造物に対しても、その構造や大きさ、配置を観察し、疾患や各機能に繋げて理解することで、よい勉強になりました。

しかし、解剖実習は楽しいことばかりではありませんでした。教科書通り

ではない構造や細かい組織の剖出に混乱したり、人体の複雑な構造に伴う膨大な暗記量に戸惑ったりと、上手くいかないことも多々ありました。医師として働くことの難しさを身をもって理解し、将来への不安さえも覚えましたが、この実習を無事に乗り越えることができたのは班のメンバーのおかげです。六週間もの間互いに教え、支え合ったメンバーには感謝の気持ちが尽きません。

今回の解剖実習を経て、心臓血管外科医になるという目標の達成には多くの困難が伴うであろうことを痛く思い知り、これまで以上の努力が必要であることを実感しました。しかし、心臓血管外科医という職業への憧れの気持ちをこれまで以上に抱くようになったのは事実です。ご献体下さった方々とそのご家族の方々に深く感謝し、これからも一層勉学に励んでいきます。

久野詩織

約一カ月半の解剖実習を終えて、解剖実習はたくさんの方の遺志を背負い、学んだ知識は臨床において基礎となり、班員とのチームワークを培うことのできる貴重な経験であったと気づくことができた。

実習が始まる前は、精神面、体力面において途中で辛くなってしまわないだろうか、ご遺体を目の前にし、死に直面した中で平然と解剖ができるのだろうか、など多くの不安を抱えていた。一方で実際に筋肉や血管、神経などヒトの体の構造について自分の目で観察することができる機会なので非常に興味を持っていた。

実習が始まってからは、不安よりも学習意欲が勝り、ヒトの体の構造や発生に非常に興味を持ち、手探りではあるがより多くの知識を身につけようと実習に夢中になっていた。教科書やアトラスで予習をしてきても、実際にご遺体に向き合い神経や血管などを探してみると、図で見た通り簡単なことではなく、特に血管の走行は教科書とは異なり破格であることもあった。そんな中で、先生方の丁寧なご指導も相まって教科書の図と異なる部分の同定もしっかり行うことができ、非常に充実した学びを得ることができた。一方、上皮小体など観察できなかったところや、納得できるほど剖出ができず悔いが残った部分もあった。神経は見つかっても何がどの名称なのか同定すること

令和五年度慰霊式（献花）

も難しく、しっかり剖出した上で走行を確かめて、初めて同定できることが多かった。このように、教科書をただ眺めて記憶するだけでは、外科手術などで対応できなくなってしまうことを実感した。また、自分の手で解剖し、自分の目で観察できたことでより深い知識と理解を得ることができたように感じた。実習最終日に花束を買いに行った。お店で受け取った花束はなぜか重く感じ、約一カ月半向き合ってきた一人の人に対してのたくさんの想いや感謝が詰まっているように感じた。

解剖実習全体を通して先生方が実習開始前から仰っていた、ご遺体が先生であるという言葉を身に染みて感じた。実習を通して学習することで解剖学の楽しさに触れ、当初の不安を忘れ学習に一心に取り組み実習を終えることができた。医学生でなくてはできない貴重な機会であったことを強く認識し、実習を終えて残った後悔を踏み台に今後の勉強に活かしたい。また、ご献体くださった方々の想いに応え立派な医者になるために精進し続けなくてはならないと感じた。

最後に、ご献体いただいたご本人及びご家族の尊い意志に対して尊敬の念を示し、感謝申し上げます。また、実習を支えてくださった技術職員の方、実習をサポートしてくださった先生方、解剖学を学ぶ機会を与えてくださったすべての方へ心から御礼申し上げます。

二村祥太

解剖実習を終えて、人体の生物としての特異性と構造の精密さに感動を覚えた。表層から浅層へ、浅層から深層へと解剖を進めていくたびに複雑な構造が現れてきたのは今でも忘れられない。解剖実習が始まってしばらくは解剖実習室での非現実的な雰囲気によって思考がまとまらなかったのを覚えている。ご遺体とほとんど同じ構造が自分の中にもあるということを単に言葉としてではなく、身をもって体感し始めたのは実習期間の中頃になってからであった。教科書の文字と絵からだけでは得られない実際の組織の大きさ、触感、強度、色あいといった情報は、今後の座学で病気を学んでいく上でとてつもない理解の助けになるだろうと思った。たとえば、「血管を縫い合わせる」というのはよく耳にする言葉であるが、文面としては理解できても、実際の様子は想像もつかないというのがこれまでであった。しかし、解剖実習で実際の血管を見たり触れたりすることで、身をもって血管の縫合は精密な動作を要求されることは想像に容易かった。また全身の解剖の中でも、心臓の解剖は非常に興味深いものであった。心臓の物理的な構造の精密さのみならず刺激伝導系といった生理的なシステムの両方が協調することが非常に興味深かった。興味深かった構造はまだある。それは内耳の構造である。内耳は半規管の三つのループをもち、それらは互いに垂直になるように配置されている、その機能として、各ループは角加速度を感知するとのことである。これらのことから、半規管の各ループはそれぞれの軸方向の角加速度を感知し、三次元的な角加速度を感知するのに必要十分な構造なのではないか?と考えたりするのが非常に楽しかった。それに加えて、

前庭の構造は直線加速度を感知するということから、半規管と前庭器官は工学におけるジャイロセンサーと加速度センサーの役割をそれぞれ持っている。工学的に必要な装置がジャイロセンサーと加速度センサーに分かれているように人体のセンサーも同じく分かれている。つまり機能と構造の分け方が工学と生物学で同じということにも感動を覚えた。これらの構造や仕組みが長い時間をかけて進化してきたことに感動し、解剖実習期間に設けられていた講義で学んだ発生学にも興味を持つようになり、発生の過程を知ることは解剖学的な構造を理解する助けとなった。およそ六週間の解剖実習で学んだのは、座学としての解剖学という範囲にとどまることなく、解剖班での共同作業、ご献体くださった方やそのご遺族との向き合い方といった座学以外の要素も大きく、そのどれもが医師として生きていくために必要な要素であったと今になってではあるがしみじみと感じており、この解剖実習が自分を大きく成長させてくれたという実感を手にしている。改めてご献体くださった方、そのご遺族、教員の方々、解剖実習のための準備を行なってくださった技術職員の方々、そして班員に感謝を申しあげたい。

服部想惟

六週間の解剖実習を振り返ると、人体の構造を実際に観察することで多くの学びを得られた一方で、「死」についても考えさせられた。

解剖実習初日、ご遺体を包んでいる白い布を開けて実際にご献体くださった方を目にすると、解剖することに対する不安と恐怖でなかなかメスを入れられなかったのを覚えている。一度メスを入れると解剖実習が始まったことを実感し、身が引き締まるような思いがした。

ご遺体はご献体くださった故人とそのご家族が私たちの学習のためにご協力いただいたものである。そのため私たちはご献体くださった故人に満足していただけるようにご遺体からできる限り多くのことを学ぶ義務があるという考えが常にあった。当然、故人は満足したからといって褒めてくれたりすることはない。だからこそ、故人に間違いなく「献体した甲斐があった」と思ってもらえるよう、解剖実習期間中は毎日実習があって時間的にも体力的にもとても過酷だったが日々の予習復習は決して欠かさずに行った。それでも、教科書やアトラスにある二次元の図と実際にご遺体で見る構造は見え方が全く異なり混乱することもあった。また血管や神経の走行、および臓器などについてアトラスなどで予習していっても、実際のご遺体とは異なることもしばしばあった。このような経験は座学だけでは絶対にできず実際に人体解剖をしたからこそ得られたものだと思う。

納棺式の日、雨が降りしきる中、初めて花束を買いに行った。その花束は精巧にできている人体の構造のように非常に美しいものだった。納棺式でのご献体くださった方とのお別れの時には、六週間にわたって私たちの「先生」として非常に多くのことを教えてくださった故人に対する感謝の気持ちで一

杯だった。この感謝の気持ちを今後も決して忘れないようにしたい。

この六週間、私は予習・解剖実習・復習のサイクルで日々精一杯学習したつもりだが、ヒトの構造で覚えるべきことはあまりにも膨大で実習期間中には理解しきれなかったことも山ほど残っている。それだけヒトの構造は繊細でかつ緻密にできているということがわかった。解剖実習を通して学んだことは今後の医学の学習においても非常に重要なことであると考える。六週間に及ぶ解剖実習を通して得たかけがえのない知識や経験を胸に刻み、将来立派な医師になれるよう今後の医学の学習に励みたい。

最後に私たちの解剖実習をサポートしてくださった先生方や先輩方、ご遺体を準備してくださった技術職員の方々、困った時に助けてくれた班員、そしてなにより私たちの解剖実習のために自らのお身体を提供してくださった故人とそのご家族に感謝を伝えたい。

「解剖学の答えはご遺体の中にあります」

宮川凜胡

先生が解剖学の実習を通して繰り返し仰っていた言葉だ。この言葉を体感できるようになったことが、解剖実習を終えて最大の成果であると感じている。解剖実習は医学生として初めて人体を相手にする機会で、初めての正解がわからない実習だった。初めのころは人体構造の名称がわからず、剖出の手順を追う上で教科書や図解本を参照しないと解剖は学べないと思い込んでいた。一方で、何度も人体解剖を担当されてきたはずの解剖学の先生方が、今回のご遺体にも熱中している様子を見て、ご遺体ひとりひとりにそんなに違いがあるものなのかと、自分の担当だけでなく、解剖実習室全体のご遺体に目を向けられるようになった。筋肉や脂肪のつき方や色形に加え、血管や神経の走行までも異なり、それぞれの小さな違いに対応するようにその他の配置がずれており、個々の体において機能を維持するためにバランスを保った構造ができ上がっている様子に大変驚いた。また、そのような違いがあってもなお、ヒトとして同じように体が機能しているのだということに感銘を覚えた。

さらに、解剖実習を通して、知識面、精神面でも大きく成長できた。実習では朝から夕方まで解剖実習室で剖出し、夜には予習や試験勉強。これまでのどんな時よりも、生活のなかで医学の勉強に費やす時間が長くなり、それでも足らないと時間があれば教科書を開いていた。ご遺体を無駄にせずしっかり学べるように、班員に迷惑をかけないようにと追い込む半ば、疲労からか発熱した日があった。患者として内科に罹り、受けた診断は急性扁桃炎だった。それまでにも罹患したことはあったが、扁桃を剖出した後に聞くと、見え方が変わっていた。体のどこでなにが起こっているのか想像できることが嬉しく、学習してきたことが報われたように感じ、私が選んだ生涯の専門分野なのだと、ようやく心から自覚できた。

このように、解剖実習で実際のご遺体すなわち人の体を剖出する意義は基礎知識を得ることだけではなく、その上に求められている。実際のヒトを前

に、教科書のように明確な答えがない中、何を正しいこととして追い求めるべきか、責任感、倫理観を育むことができたと思う。この六週間は私を含め多くの医学生にとって、医師になる将来を見据える上で、欠かせないターニングポイントとなると確信している。

最後に献体することを決断されたご本人とご家族の皆様に加え、お世話になった先生方、技術職員のみなさまに心からの感謝を申し上げたい。解剖実習中に先生方と直接お話をさせていただく機会が多くあったおかげで、様々なことを考え、広い学びに繋げられたと確信している。このような機会を与えてくださった全ての方への感謝を忘れずに、これからの生活では医学生としての責任感を忘れずに一層精進していきたい。

安　本　理穂子

およそ一カ月間の解剖実習を終え、実家に帰ると母に言われた一言。「なんだか顔つきが変わったね」と。一日中解剖漬け、勉強漬けの、今思い返してもハードな毎日を通して、医学生としての意識が確かに変わったことを自分でも感じている。

私は医学生になった時から、最も懸念していたのが解剖実習だった。医療ドラマを見ている時、手術のシーンは怖くて見ることができなかったし、薬理学の実習で蛙を扱った時も平気な顔をしている同期達に驚愕した。人体の解剖なんて自分には絶対にできない、どうして医学類に入ってしまったのだろう、と、何度母に泣きついただろう。解剖実習初日が迫ってくるにつれ、気が重くなるばかりだった。しかし、迎えた解剖実習初日、ご遺体と対面した私は、もう後戻りできないと自分の中で覚悟が決まったのを感じた。人体解剖は怖くて泣きたかったし逃げたかったけれど、ご遺体と対面した時、その行為はご献体頂いた故人とそのご家族に対して失礼だと直感的に思った。このご遺体に誠意と感謝を持って解剖実習に臨んでいかなければならない、そう覚悟を決めて解剖実習が始まった。

解剖実習期間は、身体的にも心理的にも想像以上に厳しい毎日だった。解剖実習の予習復習や試験勉強に追われ、その上１時限のために早く起きなければならず、疲労が溜まっていくばかりだった。そのような日々でも自分を奮い立たせることができたのは、間違いなく班員のおかげだと思っている。剖出がうまくいかないときはフォローしあい、疲労が溜まっているときは声を掛け合い、常に助け合って実習が進んだ。

令和五年度慰霊式（献花）

試問や試験の直前はお互いが情報共有して学習内容を教え合い、全員で乗り越えようとモチベーションを高めてくれた。この班でなければ、厳しい一カ月間を乗り越えることはできなかった。解剖班の三人に心から感謝している。

解剖実習を振り返ると、鮮明に記憶が蘇ってくる。解剖実習室特有のあの匂い、ご遺体に触れた時の感触、初めて自力で神経を剖出できた時の興奮、人体の精巧な作りを目の当たりにした時の感動。その一つ一つを五感で覚えている。これらの記憶は、私が将来どのような道に進んでもかけがえのないものであり、忘れることはできないだろう。解剖実習を通して、医学生としての自覚が確実に高まった。これからの姿勢を持って、ご遺体やそのご家族に誠意と感謝を示していきたいと思う。

最後に、ご献体くださった方とそのご家族、ご指導いただいた先生方、解剖実習に関わった全ての方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。この経験を最大限に活かし、自分が理想とする医師の姿に近づけるよう邁進していきます。

筑波大学白菊会 規約

（名称及び事務所）
第一条　本会は筑波大学白菊会と称し、その事務所を筑波大学医学群内に置く。
（目的）
第二条　本会は会員の親睦と献体運動の推進を図ると共に、医学の発展と人類の福祉に貢献するために、会員の遺体を筑波大学医学群に寄贈することを目的とする。
（事業）
第三条　本会は前条の目的を達成するために、次の事業を行う。
１、　会員の親睦
２、　献体運動の推進
３、　会報の発行
４、　その他、本会の目的を達成するために必要な事業
（会員）
第四条　本会の目的及び事業に賛同し、自らの遺体を寄贈する目的を持って入会を申し出た者を会員とする。但し、家族、またはこれと同様の者の同意を得た者でなければならない。会員は本人の希望により退会することができる。
（役員）
第五条　本会に次の役員を置く。
１、　会長１名、理事長１名、理事若干名、幹事若干名
２、　会長は、筑波大学医学群長が務める。
３、　理事は、筑波大学医学群解剖学担当の教員が務め、理事長の選出は、理事の互選による。
４、　会長は本会を代表し、会務を総理する。
５、　理事長は会務を統括し、理事は本会の運営に関して協議し会務を分担する。
６、　幹事は筑波大学医学群の事務職員の中から、会長が委嘱し、庶務及び会計を処理する。
（任期）
第六条　役員の任期は２年とする。但し、再任を妨げない。
（顧問）
第七条　本会に顧問若干名を置くことができる。顧問は、理事会の議決により、会長がこれを委嘱する。その任期は１年とする。但し、再任を妨げない。
（会議）
第八条　総会は会員を召集することなく、事業報告は白菊会ホームページに掲載とする。但し、会長は、重要案件があるときに会員を召集することができる。
（会計年度）
第九条　本会の会計年度は、４月１日から翌年３月３１日までとする。
（経費）
第十条　本会の経費は、寄付その他の収入もってこれに充てる。
（補則）
第十一条　この会則に定めるものの他、本会の運営に関して必要な事項は、理事の同意を得て会長が定める。
（感謝状）
第十二条　献体された遺族に対し、会長（医学群長）より感謝状を交付する。

付則
この規約は、昭和58年４月１日から施行する。
この改正規約は、平成24年４月１日から施行する。
この改正規約は、令和６年４月１日から施行する。

筑波大学白菊会慰霊碑案内図

○ 霊園は学園西大通り入口（交差点）から約１キロ程お進みいただいてから右折願います。

○ 霊園内の白菊会墓所につきましては、墓地区画通路の入口から70m程直進した左側にございます（下記の白菊会合葬墓及び慰霊碑の写真参照）。

（交通ご案内）

車利用の場合（常磐自動車道）
　○土浦北I.Cから15分
　○桜土浦I.Cから23分

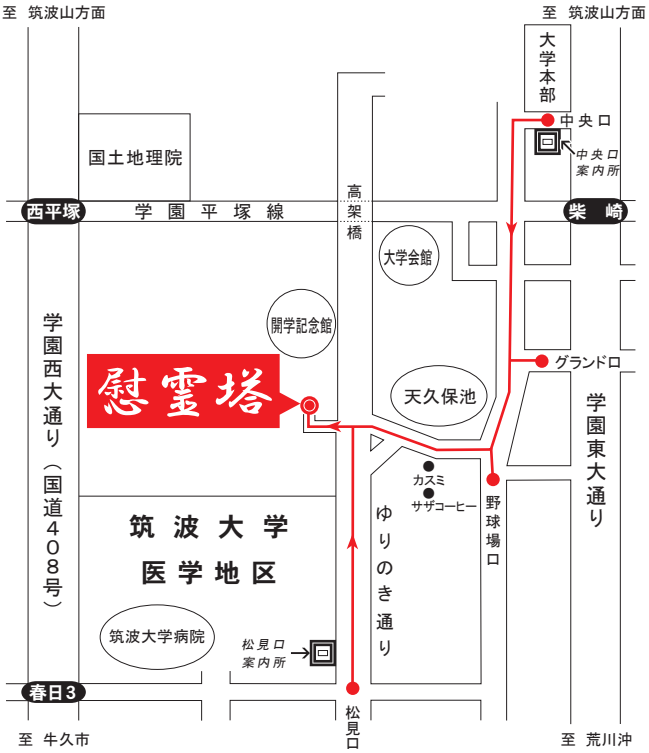
高速バス（つくば号）利用の場合
　○東京駅八重洲南口（②のりば）よりJRバスまたは関東鉄道バス「筑波大学行き」乗車～「つくばセンター」下車（約70分）➡つくバス北部シャトルに乗り継ぎ

鉄道・バス利用の場合
　○常磐線土浦駅西口（③のりば）関東鉄道バス「つくばセンター行」乗車～「つくばセンター」下車（30分）➡つくばセンターより下記のつくバス北部シャトルに乗り継ぎ
　○つくばエクスプレス（TX）つくば駅➡隣接するつくばセンター（③のりば）つくバス北部シャトル「筑波山口行」乗車～「大穂窓口センター」下車（約25分）

（所在地）〒300-3253　茨城県つくば市大曽根根本333
（お問い合わせ）０２９（８６４）６６０６

・お車でお越しの際は、上記の所在地あるいは電話番号をナビにご入力願います

筑波大学白菊会慰霊塔案内図



（交通ご案内）

車利用の場合（常磐自動車道）
　○土浦北I.Cから20分
　○桜土浦I.Cから20分

高速バス（つくば号）利用の場合
　○東京駅八重洲南口（②のりば）よりJRバスまたは関東鉄道バス「筑波大学方面」乗車～「筑波大学病院入口」下車（約75分）➡慰霊塔まで徒歩（約10分）

鉄道・バス利用の場合
　○常磐線土浦駅西口（③のりば）関東鉄道バス「つくばセンター行」乗車～「つくばセンター」下車（30分）➡つくばセンターより下記の「筑波大学循環バス（右回り）」に乗り継ぎ
　○つくばエクスプレス（TX）つくば駅➡隣接するつくばセンター（⑥のりば）関東鉄道バス「筑波大学循環バス（右回り）」乗車～「平砂学生宿舎前」下車（約15分）

お願い

ご住所を変更された場合は、白菊会事務局（電話〇二九ー八五三ー三三三〇）へお知らせ下さい。住所がわからずご連絡がとれないケースが増えております。

なお、会員がお亡くなりになり、ご事情により献体を取りやめる場合にも、ご遺族様よりご連絡をお願いいたします。

会員が亡くなられた際、ご遺族の方々にしていただくこと

一、ご遺体を大学へ引渡す日時の打合わせ

まずご遺族の間で次のことをお決めになって下さい。

(1) お通夜をせずに直ちに引渡す

(2) お通夜をしてから引渡す

(3) お通夜をして告別式をすませてから引渡す

右のうちどれかにきまりましたら献体事務室の担当者（電話〇二九ー八五三ー三二三〇）と、ご遺体引渡しの日時と場所を打合わせてください。休日・夜間のお引渡しは大鵬社（電話〇二九ー八二一ー八三三三）に直接連絡下さい。

ご遺体の搬送は大学がお引受けし、原則として自動車がお迎えにあがります。(1)の場合には必要があれば大学からお棺を持参しますが、この点も打合わせて下さい。

（注）ご遺体の大学への引渡しが二十四時間を超えるときはお棺の中へドライアイスを入れ、ご遺体の保存に御留意下さい。

二、必要書類の用意

(1) 医師の発行する死亡診断書を役所へ届出する前に、そのコピーを大学保管用にお取り下さい。お引渡しの際にお預かりします。

(2) 「埋火葬許可証」をお取り下さい。「死亡届」に死亡診断書をそえて、市区町村の役所へ提出すると交付されます。その際、火葬場所につきましては、県内の方は最寄りの火葬場、県外の方は「土浦市営斎場」とご記入願います。火葬年月日は献体のため未定とお伝え下さい。

(3) 「解剖に関する遺族の承諾書」については、大学から書式を持参します。なお、代表の方のご署名・捺印をいただく必要があるため、認印をご用意願います。